

〈平成26年度最終講義〉

ソクラテス的教育の三条件と神的なもの

米 澤 茂

ソクラテスの教育の三条件と神的なもの

米 澤 茂

理性に対する近代の拒絶を批判して、T.&S. ウェストは「公的・私的生は正義の知識に導かれねばならないと主張した」としてソクラテスに言及する。確かに、死刑判決を受けたソクラテスは亡命の正・不正に関して、「推論のうえで自分に最善と思われる結論にのみ従う」（『クリトン』46b5-6）と宣言し、その議論の結論に従い、亡命を拒否し、処刑された。しかし他方で、彼はきわめて敬虔な者であり、つねに、ダイモニオン（ダイモーンのなもの、神靈的なもの）の合図に従った。また、彼の生涯をかけたアテネ人たちに対する使命は神に命ぜられたものであった。これらの相反すると見えるソクラテスの行動原理を調停することは困難であり、多くの議論がなされている。しかし、ダイモニオンや神の命令に従うことは、必ずしも理性の拒否ではない。彼は永年の活動の結果、徳に関する人間の知恵はほとんど価値のないものであり、本当は神のみが知者であると考えている。M・マックフェランの言うように、ソクラテスは、神の理性は人間理性よりはるかに優れていると考えていたことは間違いない。

これを踏まえて、彼の教育的成功についてのソクラテスの見解を考察することにした。彼は歴史上の偉大な教育者の一人と知られているが、H・テローによると、プラトン初期作品に現れるソクラテスは教育の失敗者である。同様の見解をブリックハウスとスミス、また、G・スコットも表明している。プラトンの対話篇以外でも、古代の伝承によると（『ディオゲネス・ラエルティオス』2.5.21）、ソクラテスは市民た

ちと対話している時しばしば、打たれたり、髪を引っ張られたと報告されている。しかし他方、その優れた生き方と思想のゆえに歴史を通じて賞賛されたプラトンや「小ソクラテス学派」と呼ばれる弟子たちを残したことも事実である。だが、有名なアルキビアデスとソクラテスの関係については、当初、ソクラテスの教育はうまく行っていたが、後に、アルキビアデスは彼のもとを去り、悪評高い政治家になったこともよく知られている。

ソクラテスの教育的成功の理由を考察した研究者はほとんどいないが、スコットはソクラテスの対話相手の「生まれつきの素質」や、彼らが対話した時の「有利な条件」を述べている。しかし、これらのことはソクラテスが対話したほとんどすべての若者たちに当てはまることである。ここでは、ソクラテス自身の言葉を通じて、彼の教育的成功についての彼自身の見解を考察したい。

ここで、私は大部分の研究者たちが史的ソクラテス（実際の歴史上の人物としてのソクラテス）の活動と思想をおよそ忠実に描いていると考えているプラトンの初期対話篇を用いる。加えて、私はアイスキネスの『アルキビアデス』も用いたい。彼の作品は古代には史的ソクラテスを忠実に描いていると考えられてきたが（cf. 『ディオゲネス・ラエルティオス』2.7.61）、彼の作品はすべてが失われ、断片のみが残っている。だが、この『アルキビアデス』という作品は、その全体像を復元するに足るだけの断片が残されている。

第一節では、『ソクラテスの弁明』と『ラケス』に見られるソクラテスの教育活動を、ソフ

イストたちのそれと対比したい。第二節では、ソクラテスは人間の成功をもたらすものとして、「知識」と「神の恵み」（「神の摂理」、*theia moira*）に言及し、詩的、宗教的、政治的領域では人間の知識ではなく、むしろ、神の恵みが人間の成功をもたらすと考えていたことを明らかにしたい。第三節では、ソクラテスはいくぶん類似した考えを彼の教育活動について述べていること、また、彼の教育的成功は、彼の教育の知識によるのではなく、彼の教育的な活動と神の恵みによると考えていることを述べる。また続く、第四節では、彼の教育的成功のためには三つの前提条件が満たされることが必要と考えていたことを明らかにしたい。

1. ソクラテスの教育活動とソフィストたちの教育活動

『ソクラテスの弁明』において、法廷のソクラテスは、自然科学者であるという告発を否定し（19c-d）、また、金を取って「人間を教育する」（*paideuein anthrōpous*, 19d9）という噂を却下する。彼は後の箇所でも、誰かの「教師」（*didaskalos*, 33a5）になったことはない主張し、金を取ることなく誰にでも話を聞くことを許していると述べている（33a-b）。

このような言葉で彼は自身をソフィストたちから区別している。なぜなら、彼はここで、二人の息子たちの教育のために莫大な金を費やしたカリアスという人物に言及している。カリアスは、人間を徳に関して教育する知識を持っているのは誰かというソクラテスの問いに答えて、ソフィストのエウエノスの名を挙げる。ソクラテス自身もそのような教育者としてゴルギアス、プロディコス、ヒッピアスの名を挙げる（19e）。彼らはすべてが金を取って若者たちを教育することを公言している者たちである。このカリアスとの対話から、ソクラテスの人間教育の目的がわかる。それは、「人間として市民としての徳」（*aretēs, tēs anthrōpinēs te kai politikēs*, 20b4-5）において、人間を「立派で善き者にする」（*kalō te kagathō poiēsein*, 20b1）である。かくて、教師ないし教育者とは徳において人間を立派で

善き者にする知識を持っている者を意味する。教育の成功とは、まずは、人間として市民としての徳をめざして人々が努力する状態にすることであると思われる。

ところで、ソクラテスは、徳についての知識の欠如を自認している（20c-23b）。彼の友人カイレフォンは、かつてデルフォイの社の巫女に、人間の中でソクラテス以上の知者がいるかどうかを問うたという。「いない」という答えを聞いたソクラテスは神託の真の意味を求め、自分以上の知者を見つけ神託に反論しようとした。彼は、政治家たち、詩人たち、手職人たちのところを訪れた。彼らを吟味した結果、彼らは本当は徳を知っていないのに、知っていると思っていたが、他方、ソクラテス自身は実際知っていない通りに知っていないと思っていたので、自分の無知を自覚しているという点で、ソクラテスは自分が彼らよりより知恵があることがわかったと言う。ソクラテスは一方で神託を、人知と神知を対立させつつ、人知はほとんど何の価値もないと語っていると解釈し（23a6-7）、他方で、ソクラテスのように知に関しては何の価値もないことを自覚した者が人間の中では最も知恵があると語っていると解釈する（23b2-4）。これらを統合的に理解すれば、神託によると、人間の知恵はほとんど何の価値もないが、知恵に関して何の価値もないことを悟ったソクラテスのような者こそ、人間の中で最も知恵がある、ということになる。

ソクラテスによると、「立派で善きこと」（*kalon k'agathon*, 21d4）、つまり、「徳」の知識は人間ではなく神に属する（23a-b）。それゆえ、この知識は彼自身にも、ソフィストたちにも属しないとソクラテスは考えていたことになる。ソクラテスはソフィストたちを皮肉り、かれらは人間以上の「知恵」（*sophian*）をもっているようだと述べている（20e1）。ソフィストたちが持っていると自称する徳の知は人間以上の知者である神に属するものである（cf. 23a5-6）。ソクラテスは徳の知の欠如を自覚していたので、自分自身をソフィストたちから区別して、人に徳の学知を教えることを約束したことはない、

と述べている (33b5-6)。

カリアスとの対話においてソクラテスは、いかにして人を立派で善き者にするかの「知識を持っていない」(cf. *ou gar epistamai*, 20c3) と言う。人を徳ある者にする知識、つまり、徳を教育する知識は、「立派で善きこと」の知識、つまり、徳の知識自体とは別である。ここで「徳の知識」と「徳を教育する知識」の違いを考察してみよう。ソクラテスは『ラケス』の中で、若者たちに徳を教育することができるかと信じているニキアスとラケスが本当に「人を教育する」(*paideusai anthrōpon*, 186d1) 知識をもっているかどうか調べる。この時、「徳の知識」と「徳を教育する知識」の区別について医療の例 (190a1-5) を用いて説明している。我々がいかにすれば眼が視力を容易にうまく獲得できるかの「助言者」(*sumbouloi*, 190a4)、つまり、眼科医である場合、①我々は視力が眼をより良くすることを知っており、②また、我々は視力を眼に付け加えることができ、そしてこの時、③我々はそもそもこの〈視力とは何であるか〉を知っていなければならない。同様に、我々がいかにすれば魂が徳を容易にうまく獲得できるかの助言者、つまり、徳の教育者である場合、①我々は徳が魂をより良くすることを知っており、②我々は徳を魂に備えさせることができ、この時、③我々はそもそも〈徳とは何であるか〉を知っていなければならない (189e6-7)。このように語って後、ソクラテスは、「我々はまず初めに、徳とは何であるかを知っていることが必要ではないか。なぜなら、徳とは何であるかを知っていないなら、それを獲得する最良の方法について我々はどのようにして人の助言者たりえようか」(190b8-c2) と言う。そこで、ソクラテスは徳を教育する知識をもっていると自認するラケスとニキアスに「徳とは何であるか」を問う。そして、この問いに答えることのできない彼らが、徳を教育する知識を持っていないことを示す。ところで、ソクラテスは『ソクラテスの弁明』で、徳の知識 (= 徳とは何であるかの知識) は人間にではなく、神に属すると述べていた。もしそうなら、ソクラテスは徳を教育する知識は、

ニキアスやラケスだけでなく、そもそも人間には属しないと考えていたということになる。

それでは、金を取り、若者たちの教育者であることを公言するソフィストたちはどうなるのか。スコットによれば、ソフィストたちの教育は、金を取って徳を授与するという契約のもとに行われていたが、このようなソフィスト的教育を支配する「市場経済 (market economy)」をソクラテスは否定しているとされる。全般にスコットのソフィスト教育についての論評は正しいが、ソクラテスが「教育の市場経済」を否定していたとは思われない。ソクラテスは金を取って徳の教育をなすソフィストたちについて、「もし人が人間教育をなすことができるなら、このこと (金を取ること) も結構だ」(19e1-2) と言う。ソクラテスは金を取って徳の教育をすること自体を否定しているのではない。ソクラテスは『ラケス』の中でも、ラケスとニキアスの無知を暴いて後、「我々すべては、まず我々自身のために、次にこの若者たちのために、金もいかなるものも惜しむことなく、最善の教師を求めるべきである」(201a3-6; cf. 187a1-5) と述べている。つまり、人がもし本当に徳の教師を得ることができるなら、金を払うことも結構であるということになる。ソクラテスの観点からは教育に関わって金を取るとか取らないかは問題ではない。もしソフィストたちが本当に徳を教育できるなら、ソクラテスは金を取ることを是認するであろう。ソクラテスが疑問視するのは、ソフィストたちが本当に徳の教育をすることができるかどうかである。もし彼らが実際には徳の教育をすることができないなら、たとえ金を取らなくとも、欺瞞であるし、金を取るなら、契約違反であろう。ソクラテスはソフィストのエウエノスに言及して、「もし彼がこの知識を本当にもっており、そのような頃合の値段で教えるのなら、私は彼を祝福したい」(20b9-c1) と述べている。やはり、問題は彼がそのような知識をもっているか否かであろう。

しかしながら、デルフォイの神託の結論や先に見た『ラケス』の結論を考えると、徳の知識は人間にではなく、神に属するとソクラテスは

考えているので、徳を教育する知識もまた人間にではなく、神に属すると考えていたと思われる。ここにソクラテスとソフィストたちとの相違がある。カリアスとの対話において、ソクラテスはカリアスに彼の息子たちを立派に善き者にするのできる徳の教育の専門家は誰であるかを問い、カリアスはエウエノスであると答え、ソクラテスはこれを疑った。なぜなら、ソクラテスの考えでは、徳の知識は人間ではなく、神に属するからである。従ってまた、徳を教育する知識も人間に属さないことになる。そして、エウエノスやソフィストたちは徳の知識や徳を教育する知識を持たないのに持っていると思い、若者教育に携わった者たちということになる。『プロタゴラス』や『ゴルギアス』『ヒippias』という作品の中で、ソクラテスは知者を自負するソフィストたちの徳についての無知を徹底的に暴いている。ソクラテスから見れば、彼らは偽りの教育者たちであった。

ソクラテスによると、彼は自分自身の事柄をなおざりにし、父ないし年長の兄のごとくに、市民たちに徳を心がけるように助言してきた(31b)。このような活動について、ソクラテスは徳の知者と見える者たちを探し、彼らが本当は知っていないのに知っていると思ひ込んでいたなら、彼らの無知を暴いたという。そして、この活動を「私の神への奉仕」(23c1)と述べている。この活動は単一のものであるが、四通りの仕方でも性格づけることができよう。宗教的、倫理的、哲学的、教育的活動である。彼はこの活動を別の観点からも述べている。すなわち、彼は徳の知識をもっていると自負する市民たちに対して「知恵、真理、魂の最善の状態を配慮するように」(29e1-2)と励ましてきたと述べている。この活動の結果、人々が徳についての自己自身の無知を認め、(獲得できるかどうかは別に)徳の知を求めようになることが、ソクラテス的教育の第一歩であろう。

このような活動の結果、プラトンやソクラテスの他の弟子たちのように、優れた生き方をした者たちがいた。しかし、歴史上も、また、プラトンの作品の登場人物も、大部分の人々はそ

うではなかった。彼は徳の教育の知識をもっていないので、これは自然なことであろう。彼がそのような知識をもっていたなら、彼は常に彼の教育活動に成功していたであろう。では、何ゆえに、ある者たちは優れた者となり、他の者たちはそうはならなかったのか。

2. 人間の成功を可能にする二つのもの

ソクラテスはしばしば人間の成功をもたらすものとして、人間の「知識」(あるいは知恵、専門技術知)と「神の恵み」(*theia moira*)を挙げている。『ソクラテスの弁明』において、デルフォイの神託の意味を探る過程で、ソクラテスは詩人たちに彼らの優れた作品について尋ねたところ、彼らは答えられなかった。このことから、彼らは知識によってではなく、「生まれつきの素質、あるいは、神的靈感により」(*phusei tini kai enthousiazontes*, 22b9-c1)詩を創作していることがわかったと言う。彼は、後の箇所でも、詩人たちが預言者になぞらえていることから(22c2)、詩人たちの創作の源泉は主として神的靈感にあると考えていたと思われる。ソクラテスの詩人批判は、彼らが知識を用いて創作していないから、あるいは、神的靈感で創作しているからというのではなく、彼らが彼らの作品について知っていないのに、知っていると思っていたという点にある。ソクラテスは彼らの作品が「優れたもの」(cf. *kala*, 22c3)であることは否定していない。ソクラテスは詩人たちが彼らの優れた作品を知識によってではなく、神的靈感によって書いていると信じていた。

詩人たちの活動についてのソクラテスの詳しい説明は、プラトンの『イオン』に見られる。吟遊詩人のイオンはホメロスについてのみうまく語りことができ、ヘシオドスや他の詩人たちについてはできないと言う。ソクラテスによると、これはイオンの活動が専門的知識(532c2, 532c2)に基づいているのではなく、神的な力に基づいているからである。もし彼が「詩の専門知」(*poiētikē*, 532c8)をもっていたなら、他の詩人たちについてもうまく語りできたはずである。むしろ、彼を動かしているのは神

の力であるとされる。ここで、「神の力」(*theia dunamis*)あるいは、「神の恵み」(*theia moira*)という言葉が何度も専門知と対置され現れている(533d1-3, 534b8-c1, 534c6, 536c1-2, 536d2-3)。そして、ソクラテスは詩人たちの達成は専門知によるのではなく、「神の恵み」や「神の力」によると述べている(542b1-2)。イオン自身も最後にはこのことを認めている。

ここでのソクラテスの論点は、詩を創作するホメロスのみならず、ホメロスの詩を吟唱し、ホメロスについて語るイオンの活動も同じことに帰するというものである。ソクラテスは「磁石」(*Magnētín*, 533d4)を実例にして説明する。磁石は鉄の指輪を引き付け、「磁力」(*dunamin*, 533d7)を与えて磁化する。磁力を与えられた指輪は磁石と同じ働きをなし、別の指輪を引き付ける。時には、長い指輪の鎖が作られる(533d-e)。詩的活動で磁石にあたるのが、ムーサの女神であり、ホメロスのような叙事詩人に靈感を与える。吟遊詩人のイオンはこれらの叙事詩人からさらに靈感を与えられる(533e5)。その末端にいるのは、聴衆である。ソクラテスによると、叙事詩人たちは詩作の技術知によって創作するのではなく(533e6)、神から「靈感を与えられ」(cf. *entheoi ontés*, 533e6-7)、「占有(憑依)されて」(cf. *katechomenoi*, 533e7)創作する。つまり、彼らは「神の恵み」により(534c1, 535a4, 542a4)詩作する。詩人たちの偉大な作品は、ソクラテスによると、「人間のもの」(*anthrôpina*, 534e3)ではなく、「神的であり神を通じてのもの」(*theia kai theôn*, 534e1)であるとされる。同じことは吟遊詩人のイオンにもあてはまる。吟遊詩人たちは詩人たちと聴衆の「中間者」(*ho mesos*, 535e9)である。

次に我々は宗教者の宗教的奇跡を考察したい。次のソクラテスの言葉を考察してみよう。

「叙事詩人で優れている限りの者たちは技術知によってではなく、靈感を受けて、占有され、これらの美しい詩を語るのである。同じことは叙情詩人についてもあてはまる。ちょうどコリュバンテスの信者たちが踊る時、

正気を失うように、叙情詩人たちは美しい叙情詩を作る時、正気を失う。彼らが調和とリズムの中に入り込む時、彼らは狂乱状態にある。ちょうど、バッカスの信者たちが神に占有されて川から蜂蜜やミルクを汲み出すようにである。しかし、彼らが正気である間はそのようなことはできない。」(533e5-534a7)

引用にあるように、詩人たちはすばらしい詩を「技術知によってではなく」、「靈感を受けて」(*entheoi ontés*)、「(神に)占有されて」(*katechomenoi*)、創作する。ソクラテスは彼らをコリュバンテスやバッカスの信者たちになぞらえている。コリュバンテスは踊りを踊る時、「正気を失い」(*ouk emphrones*, 534a1)、バッカスの信者たちは、占有されて、川から蜂蜜やミルクを汲み出す(534a4-5)。彼らが正気を保っていれば、このことは不可能である(534a5)。彼らのなす宗教的奇跡は詩人たちのすぐれた詩作品に対応するものである。

バッカスの信者たちや詩人たちの達成は神的靈感や神に占有されてなされる。これは預言者の活動でも同じである(534b6-7)。詩人たちも宗教家たちも「多くの優れた事柄」(534b8)を「専門技術」や「知識」によってではなく(534b8, 534c5, 536c2, 536c1)、「神の恵み」(*theia moira*, 534c1, 535a4, 536c2, 536d3)あるいは「神の力」(534c6)によってなす。詩人たちも宗教家たちも立派なことを語り行いが、これらの詩を語り、奇跡を行うのは彼らではなく、むしろ、「神自身」(534d3-4)である。彼らは単に神の召使(534c8)にすぎない。詩人たちや宗教家たちの作品は「人間のもの」(534e2-3)ではなく、「神的で神のもの」(534e4)である。

次に政治家たちの成功について考察しよう。『ゴルギアス』におけるソクラテスによると、ペリクレスのような有名な政治家たちが政治知により政治を行っていたなら、彼らは市民たちを以前より優れた者にしたはずである。しかし、彼らは後に市民たちから手ひどい仕打ちを受けている(503c-d, 515e-516a)。ペリクレスは告発され、キモンは陶片追放され、テミストクレ

スは国外追放された。もし彼らが市民たちをいっそう有徳な者にしたなら、そのようなことは起こらなかったであろう。ソクラテスによると彼らは政治知をもった真の政治家ではなかった。彼らは国家の欲望を満たすことに長けた政治家たちであった。『メノン』では、それを望んだにもかかわらず、政治家たちは彼らの政治的徳を息子たちに授与することができなかったことから、彼らは政治知を欠いた政治家たちであったとされる(93d-e)。しかし、ソクラテスは彼らの最盛期の偉大なる政治的業績を認め、彼らは「有用で」(98c9, 98c1-3, 97c4-5), 「事柄を正しく導いた」(97a3)と述べている。確かにアリストイデスやテミストクレスはペルシアの侵略からギリシアの独立を守り、ペリクレスは彼の存命中はスパルタからアテネを守った。ソクラテスはかれらの最盛期の政治的業績を否定していない。ソクラテスによると、彼らが政治知の欠如にもかかわらず、偉大な政治的功績を成し遂げたのは、「神の恵み」(*theia moira*, 99e6, 100b2-3)によるのであり、預言者や詩人たちと同様に(99d), 「靈感をうけ」(99d3), 「占有されて」(99d3)である。以上のように、ソクラテスは、詩人たちや宗教家たち、政治家たちが彼らの偉大なる業績、成功を成し遂げたのは、知識によるのではなく、神の恵みによる、と考えていた。

3. 教育的活動における「知識」と「神の恵み」

先に述べたように、ソクラテスは人間の成功の原因として「知識」と「神の恵み」を考えていた。すると、彼は教育の知識を欠いていたので、彼の教育的成功の原因として神の恵みを考えていたのだろうか。すると、アテネ市民たちに対する彼の教育的努力は何の役割も果たさなかったのだろうか。

『テアゲス』の中で、テアゲスはソクラテスに交際してくれるよう求めている。なぜなら、彼はソクラテスと付き合い合った多くの若者たちが優れた者になったことを見たからである(128c)。「もしあなた(ソクラテス)が望んでくれるなら」(*ean su boulêi*, 128c7) 自分も優れた者にな

ることができる、と言う。しかし、ソクラテスによると、「神の恵み」(128d2)によりソクラテスに与えられているダイモニオン(ダイモニックなもの、神霊的なもの)が、ソクラテスと付き合い合っても「まったく益をうけない」(129e6)者たちとの交際を禁止するとされる。ここで、ダイモニオンはソクラテスと人々の付き合いの門番のような役割を果たしているかのである。だが、ダイモニオンが反対しないでも、ソクラテスと付き合い合っても益を受けない人々もいるとソクラテスは言う。しかしまた、ソクラテスとの付き合いを助けるダイモニオンの力により(129e6), 進歩した者たちがいたが、彼らがソクラテスから離れると元の状態に戻ったと言う(130a)。要するに、ソクラテスによると、「もし神がそれを好ましいとするなら」(*ean men tõi theôi philon êi*, 130e5-6) 彼らは徳に向けて進歩するが、そうでなければ進歩しないのである。ソクラテスは、何か神的なものが彼の若者たちとの交際、若者たちの進歩について、是認者ないし監督者の役割を果たしていると感じているようである。

次に、プラトンの『アルキビアデス』(1)という作品から、ソクラテスとアルキビアデスとの関わりを見てみたい。ソクラテスは長い間アルキビアデスを観察していたが、ダイモニオンの禁止が解けたので今日はじめて彼に語りかけたと言う(『アルキビアデス』(1), 103a-b)。自己の名声と力を人類全体に広げたいという彼の望みをかなえるためには、私なしには不可能であるとして、ソクラテスは彼を対話に引きずり込む(105c-d)。ソクラテスは彼をペルシア大王やスパルタの王と比較することにより、彼の現実を悟らせようとする。ソクラテスは最後に、徳と魂を配慮するように彼を説得する。その際、ソクラテスはアルキビアデスに、「神の助けとともに」「神が望むなら」(*meta tou theou*, 105e5; *ean theos etheliêi*, 135d6) アルキビアデスをより優れた者にできるだろうと言う。アルキビアデスも今日からはソクラテスにつねに付き従うと言う(135d)。

以上は、ソクラテスとアルキビアデスの初め

での対話である。他方、アイスキネスの『アルキビアデス』という作品には、彼らの何度かの対話の後の、ソクラテスの教育的成功が描かれている。ここでのソクラテスの目的は、若くて驕慢なアルキビアデスに彼の現実を見つめさせ、徳を追求するように励ますことである。アルキビアデスは生きていくうえでの知識も乏しく、自分への配慮もしていないが (SSR, A50, 42)、ペリクレスを見下している (A46, 3)。ソクラテスはアルキビアデスを大政治家テミストクレスと対置し、アルキビアデスの用意・準備のなさを悟らせ、テミストクレスよりはるかに劣っていることを明らかにする。アルキビアデスは「膝に頭を埋めて号泣し」(A 51, 6)、ソクラテスに「徳を授与してくれるように」(A52, 2-3) 求める。このようにして、ソクラテスはアルキビアデスを「益することができた」(*dunasthai ôphlêσαι*, A53, 4-5) として彼の教育的成功を認めている。ソクラテスはここからアルキビアデスをテミストクレス的な徳ではなく、ソクラテス的徳へと導こうとする。

ところで、ソクラテスはアルキビアデスの改悛に関して論評し、アルキビアデスに関しての教育的成功の原因を、彼の教育の「専門知」(*technê*, A53, 4) によると考えたとしたら、自分自身の愚かさを責めねばならないと述べている。むしろ、この成功は「神の恵みにより与えられた」(*theiai moirai moi touto dedosthai*, A53, 6) と彼は述べている。ここで、神の恵みはいかなる役割を果たしているのだろうか。

ソクラテスは実例として病人の例を挙げる。病気からの回復は、医術、つまり、「人間に属する技術知」(*anthrôpinêi technêi*, A53, 11, 12) によるか、あるいは、「神の恵み」(*theiai moirai*, A53, 11, 12) による。たとえ医者が匙を投げたとしても、病人は時には健康への欲求に導かれて回復することがあるとソクラテスは言う。これについて、ソクラテスは、彼らは「神の恵みにより健康になった」(*hugieis gignontai — theiai moirai*, A53, 11) と言う。つまり、医術によらずに、病人が回復するためには、病人自身の健康への欲求と神の恵みの両方が必要である。

ソクラテスは、アルキビアデスが改悛して、より善くなったことについて、彼の教育の知識によるのではなく、神の恵みによってであることを、バックスの信女の起こす奇跡を実例に用いて説明する。

「そして、私は、アルキビアデスに抱いた愛を通じて、バックスの信者たちと同じことを経験した。なぜなら、彼らは靈感を得るとき、他の者たちが水すら汲むことのできないところから蜂蜜やミルクを汲み出す。そして、私は教えることで人を益する学知を心得ていないけれども、この男と共に在ることにより、愛を通じて彼をより優れた者にするができると思った。」(A 53, 22-27)

プラトンの『ソクラテスの弁明』(20c3)と同様、ここでもソクラテスは教えることによって人を益する「学知」(*mathêma*, A53, 26) をもっていないと言っている。先に見たように、プラトンの『イオン』で、ソクラテスは詩人たちの達成をバックス信者たちのおこす奇跡になぞらえていた。アイスキネスの描くソクラテスも、彼の教育的成功はバックス信者たちの奇跡に似たものであり、「神の恵み」(A53, 6) により与えられると考えている。だが、神の恵みが教育の成功のすべての原因とは考えられない。彼は私事をなおざりにし、毎日、人々に徳を追求するよう助言し、対話をなし、エレンコス(論駁的議論)を行使した。アイスキネスの『アルキビアデス』という作品からも明らかなように、彼はアルキビアデスに対してもこのようなことをなしている。しかし、ソクラテスのこのような教育的努力にもかかわらず、彼は多くの場合に失敗している。しかし、教育的成功が見られるアルキビアデスのケースについては、彼は「神の恵み」によると言う。彼は明らかに敬虔な人物であったので、教育的成功を達成した場合には、何か神的なものが彼を助けたと感じたのであろう。これが「神の恵み」によってという言葉の意味であろう。だが、実際に「神の恵み」が事実としてあったかどうかは別の話である。

今は、彼がどう考えていたかを考察しているのである。

ソクラテスの成功は、ソクラテスの対話相手が世俗的誘惑に抗する能力をもっていたからと人は考えるかもしれない。しかし、ソクラテスが彼の教育的成功をバックス信者たちの奇跡になぞらえているように、アルキビアデスは善くすることの困難な人物である。彼は、自負心で一杯で (A46, 5), 他人を何の価値もないと考え (A46, 5-6), オリンポスの神々をすら非難し (A46, 4-5), まだ若いのにペリクレスを軽蔑し (A46, 3), テミストクレスの生を否定するような驕慢な者であった (A50, 3-4)。彼はもっとも世俗的な誘惑に弱い人物であった。彼に改悛をなさせたのは彼の能力ではない。

ソクラテスの対話相手はしばしば、徳の知者、有徳な人間であると自負する人たちであった。ソクラテスはエレンコス (反駁的議論) を通じて彼らをアポリアに追い込み、徳の知の欠如を自覚させようとした。これが彼らを徳に向けて優れた者にする第一歩である。しかし、エレンコスにおける成功は、彼らの無知を暴くこと自体にあるのではなく、彼らに無知を自覚させ、徳を追求するよう励ますことである。エウテュフロンやプロタゴラスは、ソクラテスに反駁されても他の用事を口実に立ち去って行く (『エウテュフロン』15e; 『プロタゴラス』361e)。カリクレスは反駁されても、ソクラテスが何を言っているのかわからない振りをする (『ゴルギアス』505c)。ヒッピアスはソクラテスにより反駁されたのに、それに気づかず、ソクラテスの議論をさげすむ (『ヒッピアス』(大) 304a)。しかし、ラケスやニキアスはソクラテスとの対話の終わりに無知を認めている (『ラケス』)。

では、ソクラテスの教育的努力と「神の恵み」との関係はどうであろうか。もしソクラテスが徳の教育の知をもっていたなら、彼の対話相手は、ソクラテスにより無知を暴かれて徳を追求することに乗り出したはずであろう。しかし、ソクラテスの努力にもかかわらず、多くの人々は自分の無知を認めなかった。ごく少数の人々がそれを認め、徳の知を追求することを始めた。

このような人々について、ソクラテスは何か神秘的なもの、あるいは、神の恵みが彼を助けてくれたと感じたと思われる。なぜなら、アイスキネスの『アルキビアデス』の中で、「アルキビアデスの場合、このこと (教育的成功) は神の恵みにより私に与えられた」(A53) と述べているとおりである。彼は、「人間世界にある善きものうち、神々から与えられなかったものは何もない」(『エウテュフロン』15a) と述べているような敬虔な人物である。それゆえ、ソクラテスの教育的成功は、彼自身の教育的尽力に加え「神の恵み」が必要であると考えていたと思われる。

4. ソクラテスの教育的成功を可能にする三つの前提条件

最後に、ソクラテスの教育的尽力として、ここでは、彼に教育的成功をもたらした三つの前提条件について考察したい。アイスキネスの『アルキビアデス』では、ソクラテスがアルキビアデスを改悛させたことが、バックスの信女たちが「靈感を受けた時」(*entheoi genôntai*, A53, 24) になす奇跡に比せられている。すると、彼の教育的成功はバックスの信女たちの奇跡や詩人たちの詩作品の創作と同じことなのか。すると、彼は教育的成功をなした時、信女たちや詩人たちと同様に靈感状態にあったのか。A・テイラーは、ソクラテスは「熱狂状態」にあったと言う。B・エーラーズによると、ソクラテスは靈感状態にあったが、「正気を失ってはいなかった」と言う。しかし、ソクラテスは、『イオン』(534a-b) の中で、神的靈感と正気を保つことは両立しないと述べている。ここで、ソクラテスはバックスの信女たちのような神に占有された靈感状態にあったとまでは言っていないと言うG・ヴラストスが正しいと思われる。確かに、ソクラテスがアルキビアデスや他の者たちと入念で精密な論理的な議論をしている間に正気を失っていたとは考えられない。ソクラテスが自分をバックスの信女たちになぞらえている論点は、両者とも知識をもたないのに、「神の恵み」により、善き事を成し遂げているという

点にある。このことは、ソクラテスが用いている病人の回復の実例でも同じである (A53, 10-15)。病人は医者が見離したときでも、いろいろのやり方を試みて、「神の恵み」により健康を回復する場合がある。この場合も、病人は正気を失っているわけでも、神に占有された状態にあるわけでもない。つまり、詩人たちや宗教家の場合と違い、靈感状態・占有状態はソクラテスの教育的成功を可能にする前提条件とは言えない。

『イオン』で、神の恵みは「神の力」とも言われる (533d3)。これは詩人たちにすぐれた詩作品を創作させ、バッカスの信女たちに宗教的奇跡を起こさせる力である。病人は、たいていは医術という人間の技術知により健康になるが、医者が匙を投げた場合も、神の恵みにより回復する場合がある。この場合、ソクラテスによると、病人の健康への「欲求」(*epithumia*, A53, 13) が前提条件になる。では、教育の場合、人間は教育的成功を可能にするために何ができるのか。

(1) 先に引用したアイスキネスの『アルキビアデス』のソクラテスの言葉に戻ろう。ソクラテスは「私はこの男 (アルキビアデス) と共に在ることにより、彼への愛を通じて、彼をより優れた者にできると信じた」(A53, 27) と述べている。「彼をより優れた者にできると信じた」という言葉は、アルキビアデスが優れた者になり、より善き者になることをソクラテスが望んだということを示している。これはまた、ソクラテスにとって、徳をめざして優れた者になることは、より幸福になることを意味するので、ソクラテスはアルキビアデスの幸福を願っていたことを意味する。つまり、対象の幸福を願うことはソクラテスの教育的成功の前提条件の一つであると考えられる。これは彼をソフィストたちから区別する点でもある。ソフィストたちにはもっぱら金儲けが関心の的であった (『ヒッピアス (大)』)。

(2) 「愛を通じて」(*dia to eran*) という言葉は、ソクラテスの教育的成功が対象への愛を前提条件の一つとして必要とすることを意味する。そして、

対象への愛は対象の幸福への願いを含んでいる。プラトンの初期作品やアイスキネスにおいて「愛」を意味するギリシア語は、エロース (*erōs*) とフィリアー (*philia*) である。『リュシス』において、ソクラテスはリュシスの両親がリュシスを「愛している」(*philei*, 207d6) ことを確認した後、直ちに、「それゆえ、彼らは君が幸福であることを望んでいる」(207d7) と述べている。ソクラテスはここで家族間の愛にフィリアーという言葉を用いている。しかし、同じ作品の中で、パイディカ (恋される者, *paidika*, 210e3) であるリュシスに対するヒッポタレスの恋愛関係の愛についてエロース (204e10, 205a4) という言葉が用いられている。これはアイスキネスの『アルキビアデス』でも同様であり、ソクラテスは彼の愛 (エロース) を通じてアルキビアデスを優れた者にすることを望んでいる (SSR, A53, 22-3, 27)。徳に向けてにより善き者となることは、ソクラテスにとって、より幸福になることである。つまり、フィリアーもエロースもどちらも愛の対象が幸福となることへの願望を含んでいると思われる。

カーンの解釈によると、エロースは神からの贈り物、つまり、「神の恵み」を意味する。なぜなら、カーンは『イオン』における磁石の比喩において、詩人たちに与えられる磁力がエロースに対応すると考えるからである。磁石が鉄の指輪に磁力を与え、その指輪が別の指輪を引き付けるように、神 (磁石) はソクラテス (鉄の指輪) にエロース (磁力) を与えてアルキビアデス (別の指輪) を引き付ける。ソクラテスがアルキビアデスを引き寄せる時、カーンによると、彼はアルキビアデスに徳を求める欲求を植えつける。この欲求は、病人の健康への欲求に対応する。しかし、カーンの解釈にはいくつか無理があるが、その詳細はここでは省略する。

(3) 「私はこの男 (アルキビアデス) と共に在ることにより、彼への愛を通じて、彼をより優れた者にできると信じた」。ソクラテスの教育的成功にとって、対象と「共にあること」「共在」(*xunōn*) は前提条件の一つとして重要である。むしろ、このことは同じ場所に共にいることだけを意味するのではない。アイスキネスの『アルキビアデス』で

明らかのように、ソクラテスはアルキビアデスと「共にある」時に、同じ場所であって、アルキビアデスと徳に関して論じ、エレンコス（反駁的議論）を行使し、アルキビアデスの惨めな現実を悟らせ、ついに、アルキビアデスの改悛をもたらしている。「共にあること」はソクラテスのそのような徳に関わる議論、反駁的活動を含んでいる。

アルキビアデスは後に悪評高い人物になる。結局はソクラテスの教育は失敗したといえよう。だが、ソクラテスの愛にもかかわらず、ソクラテスとの「共にあること」を解消したのはアルキビアデスである。アルキビアデス自身がこう語っている。「私はソクラテスの言うことに耳を閉ざし、彼から逃れた」（『饗宴』216a-b）。

このようにして、ソクラテス的教育の三つの前提条件とは、(1)対象への愛、(2)対象の幸福への願い、(3)対象と共にあること、である。このことは、『ソクラテスの弁明』でも確認できる三条件である（cf. 『ソクラテスの弁明』31a1, 29d, cf. also 31b, 36d9-e1）。これらがソクラテスに可能な教育的尽力のすべてである。

しかしながら、ソクラテスの多大なる教育的尽力により、三つの前提条件が満たされたとしても、神がソクラテスに「神の恵み」を与え、教育的成功を保証するかどうかは不明である。むしろ、彼の教育的尽力はたいていの場合、失敗している。成功するのは少数の場合に留まる。ソクラテスの考えでは、神の恵みが与えられ、ソクラテスに教育的成功がもたらされるのは、神がそれを是認する場合のみである。しかし、神の意図は人知を超えている。プラトンの『アルキビアデス』（1）の巻末に、アルキビアデスは彼の哀れな状況から逃れるためにソクラテスの助力を求めている。ソクラテスは「もし神が望むなら」（*ean theos ethelêi*, 『アルキビアデス』（1）, 135d6）と答えている。このような答え方は彼のきまぐれを神に帰するためと人は考えるかもしれない。しかし、『テアゲス』の巻末で、ソクラテスは「もし神が好むなら」（*tôi theôi philon êi*, 130e5-6）テアゲスは大いに進歩するであろうと言い、『テアイテトス』では、彼が交際した者たちは「もし神が許すなら」（*an ho theos*

pareinê, 150d4）驚くほどに進歩すると述べている。先に述べた教育の三条件、あるいは、ソクラテスの教育的尽力は不可欠の前提条件であるが、たとえ彼がこの三条件を満たしたとしても、彼はたいていの場合、失敗している。彼が教育的成功を得ることができたのは少数の場合のみであり、そのような場合について、彼は神の恵みがあつたと感じたと思われる。彼の教育的成功のためには、彼の教育的尽力により教育の三条件を満たすことは必須条件である。しかし、これらに加えて、彼には不確かだ把握しがたい何か神的なものの助力・介入が必要であると彼は考えていたと思われる。

（本稿は、“*Socrates on Educational Success*”と題して執筆した英文論文を和訳して、ペスタロッチ祭の最終講義用に改稿したものである。英文論文の注はすべて割愛した。英語版は米国の哲学誌に掲載される予定である。）